

令和4年12月27日

令和4年度 第5回西宮市民ファミリーハイキング事業報告

奥アンツーカ（株）

【実施日時】 令和4年11月19日(土) 9:30~12:10

【実施概要・コース】

今回は、秋の紅葉が進む六甲山を訪れました。

まず、1932（昭和7）年に竣工したレトロな六甲ケーブル山上駅に集合だったのですが、六甲ケーブルは車両不具合で代行バス運転となっているところに、当日は、紅葉目当ての観光客が大勢押しかけ、六甲ケーブル下駅で、一時3時間待ちと言われる状況となりました。



「これでは、参加者が集合場所に到着できないのでは」と心配される状況となり、急遽、要員をケーブル下とケーブル山上駅に分けて対応することとなりました。

ハイキング参加者がごく少数になることも予想してケーブル山上駅に向かうと、すでに多くのハイキング参加者の方が山上に居られました。多くの方が余裕をもってケーブル代行バスが混み始める前に、ケーブル山上駅に到着しておられ、予定通りに13:30過ぎに、まず、六甲ケーブルについて説明を聞きました。



1 六甲ケーブルについて

六甲ケーブル線（ろっこうケーブルせん）は、兵庫県神戸市灘区の六甲ケーブル下駅から六甲山上駅に至る六甲山観光のケーブルカー路線で、1932年（昭和7年）六甲越有馬鉄道により開業しました。1938年（昭和13年）7月の豪雨災害（阪神大水害）により六甲ケーブルは全線不通となり、倒壊した六甲ケーブル下駅は、現在の山小屋風建築に建て直されました。

六甲山上駅は、六甲ケーブル開通と同時に竣工したレトロな駅舎で、玄関の大きな扇形の庇（ひさし）やアールデコ風のテラコッタや丸窓など見どころの多い建物です。



こんな説明を聞いた後、六甲ケーブル山上駅を出発し、サンライズドライブウェイを経由し、六甲山のおいたちや歴史、植物・動物など六甲山の魅力を紹介した六甲山ビジターセンターに向かいました。

13:50頃、六甲山ビジターセンターに到着。ここで、六甲山の歴史についての説明を聞きました。

2 六甲山の歴史

まず、江戸時代の六甲山は、樹木の伐採が進みはげ山と化していたのが、明治以降、山上の開発が進むとともに大規模な植林により緑を取り戻し、現在の「都市山・六甲山」につながった歴史があり、また、その開発には、居留地在住の外国人による六甲山上開発が大きな影響を与えているとのことでした。

慶応3年（1867年）12月に神戸が開港すると、外国人居留地が設けられ、多くの欧米人が居住しました。この欧米人の中の一人、英国出身のA.H.グルームは、グラバー商会の出張員として明治元年（1868年）に来神して宮崎直と結婚、居留地で茶の貿易を営みます。明治28年（1895年）3月、六甲山上の一角を賃貸する契約を結び、6月には三国池池畔に山荘を建てて六甲山をレクリエーションの場として利用することの先鞭をつけます。

明治38年（1905年）に阪神電車が開通して交通が便利になり、山上の利用が進み、明治43年（1910年）7月の朝日新聞によると日本人12戸、イギリス人28戸、フランス人2戸、ドイツ人9戸、アメリカ人4戸、ベルギー人1戸の計56軒の山荘があったそうです。また、六甲山上に登るために彼らは私財を投じて約1.8m幅の登山道を整備しました。当時山上への交通手段としては特製の駕籠（かご）や馬が利用されていましたが、これらの駕籠や馬の利用は昭和初期まで続いたといわれます。

<レクリエーションとしての登山>

積雪や濃霧の悪天候のために冬季閉鎖されるゴルフ場のシーズンオフを利用したレクリエーションとして登山活動が盛んに行われるようになります。六甲各地に残るアゴニー坂やアイスロードなど欧風の地名はその当時、つけられたものです。

一方、グルームは私費を投じて植林や登山道の整備を行い、兵庫県の服部知事などに六甲山地の砂防や植林の必要を説いていたといわれています。グルームは六甲山村長とも呼ばれ、昭和30年（1955年）に再建された「六甲山の碑」とグルームの胸像があり、毎夏、多数の市民が参加して六甲山の夏山の安全を願う「グルーム祭」が行われています。

<大正から昭和の観光開発>

大正時代以降、富裕層の日本人の別荘が増加し、当時電気供給事業も行っていた阪神電鉄によって山上にも電灯が灯されるようになりました。大正14年（1925年）には、摩耶ケーブルが営業を開始、昭和2年（1927年）に、有野村から阪神電車が約250haの土地を買収したことが本格的な六甲山の観光開発の契機となりました。昭和3年（1928年）には裏六甲ドライブウェイが開通し、有馬から山上へのバスが運行を開始し、昭和4年（1929年）に表六甲ドライブウェイが開通、阪急六甲から山上へのバス運行を始めました。

こうして、かつて生活資材を調達する場であった六甲山は観光レクリエーションの対象に変わっていき、昭和6年（1931年）六甲ロープウェイが開通。翌年六甲ケーブル開通。登山交通の整備とともに昭和4年（1929年）には旧六甲山ホテルが営業を開始し、昭和8年（1933年）六甲高山植物園開園、昭和11年（1936年）凌雲荘開業など次々と観光施設が整っていきました。

説明の後、希望者は、周辺の旧六甲山ホテルなどを回る軽登山気分を楽しめる山道（約1.3km）を歩きました。また、ビジターセンターに残った参加者は、センターの見学や神戸・大阪の眺望を楽しみました。そうこうしているうちに、六甲ケーブル代行バスの混雑で遅れていた参加者の方も合流となりました。

14：20頃、六甲山ビジターセンターを出発、神戸ゴルフ倶楽部のクラブハウスに向かいます。

途中、冬季間のストーブへの火入れ式でニュースで紹介される六甲山小学校前を通り、山小屋風の建物が所々に見られる道を歩き、14：35頃、神戸ゴルフ倶楽部のクラブハウス前に到着しました。



3 神戸ゴルフ倶楽部とクラブハウス

このゴルフ倶楽部も、今の六甲山の歴史を作ったA.H.グルームが、50歳を過ぎた1898年（明治31年）から、3年がかりで、私財を投じて4ホールのゴルフ場を六甲山に建設したものです。当初は仲間内だけで楽しむためのプライベートコースでしたが、噂の広まりとともに徐々に来場者が増えたため、倶楽部形式での運営に変更され、1903年（明治36年）「神戸ゴルフ倶楽部」が誕生しました。またホールの増設を重ねて、1929年に概ね現在のコースレイアウトとなりました。ちなみに日本最初の倶楽部競技は、1903年（明治36年）5月24日の神戸ゴルフ倶楽部の開場式の日に行われたものです。

現在のクラブハウスは、1932（昭和7）年に著名な建築家 W.M.ヴォーリズの手により建て替えられたもので、今や80年にもなるヴォーリズ設計の、質素だが風格のある木造クラブハウスは、ゴルフ博物館と言ってもよく、会員の心の故郷と言われています。建て替えられたクラブハウスは、近代化産業遺産として登録されています。

説明の後、六甲山を縦走するハイキングコースに入り、六甲枝垂れ・見晴らしの塔・六甲ビューパレスなどがある六甲ガーデンテラスまでの約3.0kmを歩いてハイキングは終了となりました。



令和4年度 第5回ハイキング(六甲山ビジターセンター・神戸ゴルフ倶楽部・六甲山ガーデンテラス)の行程図

(地理院地図より)

